

特集 世界は村上春樹をどう読んでいるか

今年の3月25日からほぼ1週間にわたって、東京、神戸、札幌で、世界中の村上春樹作品の翻訳者を招待して、シンポジウム「春樹をめぐる冒険——世界は村上文学をどう読むか」が開催された。作家や芸術家と違い、ふだん日のあたらぬ場所です仕事をしている翻訳者たちに脚光を当て、彼らの目を通して日本文学が国際的にどのように受け入れられているかを知るといふ意味では、これはきわめて成功した催しであったと思う。この企画の最初の提唱者として、また実際に企画に携わった4人の文学研究家の1人として、自分なりにその意図を説明しておきたい。

海外でのハルキ・ブームはなぜ起きたのか

日本は1980年代まで、国際的な意味での経済力と文化力の隔たりに、大きな悩みをかかえてきた。日本文化

は洗練されてはいるが、きわめて特殊な性格のものであって、国際的にポピュラリティをもちえないのではないかと議論が、しばしばなされてきた。日本とはトランジスタラジオにはじまり、ビデオデッキ、ウォークマン、カラオケ、デジカメといった電化製品の輸出国ではあっても、こうしたテクノロジーが運搬することになるソフト面の文化の輸出に関しては、著しく遅れているという印象のもとに語られてきた。

だが、80年代の終わりから少しずつ、文化編成をとりまく状況に変化が見られるようになった。グローバルな巨大メディアが出現するようになり、日本が生み出した文化商品が次々と海外へと進出するようになったのである。今日では日本のサブカルチャーは近隣の東アジアはもとより全世界的に受け入れられ、新しい世代の感受性に決定的な影響を与えつつある。

90年代に本格的となったハルキ文学の海外でのブームは、アニメとゲームソフトの世界市場への参入と時を同じくしている。村上は、これまでの谷崎潤一郎や川端康成とは違い、日本文化を代表する作家として海外で翻訳され、消費されているのではない。どこの社会でも、自分たちの政治的挫折や恋愛観、孤独と虚無を癒してくれるテキストとしてまず受け入れられ、読者はそのあとで著者が日本生まれであり、手にしていた書物が実は翻訳書であったことに改めて気付くといった按配である。なるほど村上は日本語で執筆する日本の作家ではあるが、彼が依拠している文化的感受性や、言及している音楽や映画、あるいは都市生活のあり方は、今日のグローバルバーゼーションのなかにあって世界的に流通し浮遊しているものであって、特定の土地や民族に帰着しえない性格をもっている。



よもたいぬひこ
四方田犬彦

明治学院大学教授

ハルキ・ブームを
どう考えるか

日本のステレオタイプの 不在が意味するもの

今回のシンポジウムでなされた発言には、それを証拠立てるものがいくつも見受けられた。伝統的に反日意識の強い韓国で、ハルキは日本文学としてではなく、ハルキの文学としてまず享受されている。『ノルウェイの森』の登場人物の名前をデンマーク風やポーランド風に直してみれば、デンマークやポーランドの読者はそれをたやすく自国の小説と勘違いして読み通してしまうだろう。云々。

ハルキ・ブームのこの性格は、82年にNHKテレビで放映されたあと、アジア・アフリカ・旧ソ連の国々に渡って爆発的な視聴率を得たドラマ『おしん』と比較してみたとき、いっそう明らかとなるだろう。貧困の身から立ち上がり、困苦のすえ幸福となる女性の一代記には、日本人が伝統的に規範としてきたエートスがきわめてわかりやすい形で描かれている。そして、それは発展途上国がある時期、イデオロギーとして必要としてきたものでもあった。

だが、ハルキの小説には、こうした伝統的な日本らしさを感じさせるものがほとんど存在していない。いかなればそれは、文化的無臭性において国境を越え、外国人に強く支持されることになったのだ。『ノルウェイの森』のなかにはビートルズへのノスタルジアはあっても、サムライもゲイシャも登場しない。いわば日本のステレオタイプの不在において、この小説はきわだっているのである。そして、90年前後に国際的な日本文化のイメージ領域において生じたのは、『おしん』からハルキへのモデルの転換であった。

文化的コスモポリタニズムと ローカリテイの問題

今回のシンポジウムの主眼は、村上文学を日本文学の代表として顕彰することでもなければ、次はノーベル賞かと、国威発揚を無邪気に祝賀することでもない。特定の言語と言語の間の翻訳において立ち現れる細部を細かく確認しあうだけである。文化の翻訳の次元において考えられなければならない。

日本文化は今後も、国境を越えて海外で大きく受容されていくことだろう。だがそのさい、それがグローバル化の状況にあつて大衆の人気を獲得するために、文化的無臭性を必然的に身にまわなければならないとすれば、はたしてその現象を無邪気に歓迎しているだけではないものだろうかという問いである。日本文化が国際的に理解されるためには、地政的に背負っているローカリテイはどこまで犠牲にされるべきなのか。文化的なコスモポリタニズムと、それに対するローカリテイの問題が、ここで新たに議論されなければならない。

この特集に収められた発言と証言の数々は、そうした問いをわれわれが考えるにあたって、貴重な資料となることだろう。



よもた いぬひこ ● 専門は映画研究及び比較文学。映画、漫画など幅広い領域で批評活動も展開。本シンポジウムには企画当初から関わり、「案内人」の一人として、「映像世界にみる村上春樹」のテーマでの講演に加え、ワークショップ「表象論『グローバル化のなかの村上文学と日本表象』」のモデレーター、神戸でのシンポジウムの基調講演と総司会を務めた 撮影：高木厚子

